南九州地域科学研究所所報
第34号 （2018） １～27頁

図画工作科の「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業づくり

Development of Lessons for Realizing 'Subjective, Interactive and Deep Learning' in Arts and Crafts

井上周一郎*・下之薗崇**
Shuichiro Inoue, Takashi Shimonosono

*鹿児島女子短期大学　　**鹿児島大学教育学部代用附属田上小学校

本研究では、図画工作科の「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業づくりを考察するため、鹿児島市内の小学校で実践研究を行った。ここでは、造形遊び（１）、工作に表す（１）、立体に表す（１）の全３回の表現活動において、筆者らが“主体的な学び”“対話的な学び”“深い学び”について掘り下げた要点と工夫を適切に位置づけ、その効果を通して検証した。その結果、各々の要点と工夫は概ね効果的で重視すべきものであることが明らかになり、３つの学びの姿が一体的に高められることで、様々な課題解決につながる資質・能力を育成することを改めて理解した。また今回「主体的・対話的で深い学び」には様々なレベルがあることを実感した。今後、学年毎に表現領域の到達目標をより明確化することで、各題材における学習のめあてと授業づくりの在り方を見い出しやすくなるとの見解に至った。

Key words：図画工作科　主体的・対話的で深い学び　授業づくり

Ⅰ．はじめに

2020（平成32）年に施行される小学校の新学習指導要領において、図画工作科の目標は「表現及び鑑賞の活動を通して，造形的な見方・考え方を働かせ，生活や社会の中の形や色などと豊かに関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。（平成29年５月）」と告示された。この改訂に際し、当初は「アクティブ・ラーニング」が目玉になっていたが、実際には「主体的・対話的で深い学び」に言い換えられ、学校現場では具体的な対応が求められている。

図画工作科では、従来から「アクティブ・ラーニング」的手法を実施し、“主体的な学び”や“対話的な学び”が、教科の特性として重視されてきた。そのため今回の変更は、特別な方向転換ではなく、これまでと大きく異なる授業を行う必要はない。今日までの教育実践の蓄積を引き継ぎ、子供の発達や実態に対応する“深い学び”に向けての改善が必要とされている。

そこで本稿では、図画工作科における“深い学び”を探究するために、鹿児島市内の小学校で実践研究を行い「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業づくりの在り方を検証する。ここでの考察を通して、その手がかりを具体的に見出したい。

Ⅱ.「主体的・対話的で深い学び」の実践

１．研究の方法

この度の研究では、鹿児島大学教育学部代用附属田上小学校の１・２・３年生を対象として、日本文教出版の教科書を参考にしながら、A 表現の「造形遊び（１）」「絵や立体、工作に表す（２）」の全３回の活動を設定する。ここでは筆者らが“主体的な学び”“対話的な学び”“深い学び”の３つの姿を掘り下げ、各々の要点を学習活動に工夫して位置づけることで、どのように学びが深まるかを考察する。

これらの３つの学びは、個別に成り立つ姿ではなく一体的に現れるものと考えられる。いずれも欠かすことのできない大切なものであろうが、今回はそれぞれが実現されるべき重要な学びの姿と捉え、到達に導くための主な要点と工夫を下記の通りに整理する。ここでの項目の内容を踏まえ、限られた学年と題材の授業を通して、個別に実践的な検証を行う。

本稿の全体的な執筆は代表研究者・井上が行い、授業に関しては各指導者と方向性を打合せし、その学習指導略案の作成

と実践は依頼するものである。

（1）“主体的な学び”を実現する要点と工夫

①段階的な学びに留意し、児童の興味や関心、実態を踏まえ課題設定する
②課題解決への効果的な意欲付けをするため、児童の心を動かす導入を行う
③見通しを持って前向きに取り組めるよう、おおよそのゴールを伝える
④学びの意味付け・価値付けをするため、振り返りでは言語活動を充実させる

（2）“対話的な学び”を実現する要点と工夫

①課題解決のため、モノや技法と対話する場を十分に確保する
②自己との対話を深めるため、手や身体を通して思考することの大切さを伝える
③他者との学び合いを重視し、有効的な対話の場面を設ける

（3）“深い学び”を実現する要点と工夫

①課題解決に向け、学びの質を高めるために発想・構想・創造のプロセスを改善する
②図画工作科で育成すべき資質・能力の「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力、人間性等」を相互に関係付けて育成するため、造形的な「見方・考え方」を働かせる場面を効果的に設定する
③製作に対する柔軟性や汎用的能力に結びつけるため、造形的な「見方・考え方」を働かせることの面白さ・豊かさ・大切さを伝える
④学びが実感できるよう、一方向の授業の流れではなく、必要に応じて行ったり戻ったりする学習過程を大切にする

２．各題材の学習指導略案

◆　実践Ⅰ：表現「工作に表す」の学習活動

＊各指導者が、特に検証したいことは冒頭にまとめられている。

図画工作科学習指導略案

平成29年7月19日（水）１校時　１年２組教室

１年２組　２６名　　指導者　西　郷　翔　平

本授業は、以下の検証を行うものである。

適切な素材を幾つか準備し、それに十分に慣れ親しむ時間を設定することは、子供が試行錯誤しながらこだわりをもって自分の製作に生かす手立てとして有効であったか。

１　題　　材　　チョキ　チョキ　かざり

２　本　　時（１／３）

(1)　目　　標

はさみの使い方を身に付け、紙の折り方や切り方を工夫してできた形の面白さに気付き、つながる形や折り方、切り方を試しながら進んで活動することができる。

(2)　評価規準

はさみの安全な使い方を理解し、紙を重ねて切ることができる。　【知識・技能】

紙の折り方や切り方を工夫し、色や形、イメージに着目して表現している。　【思考・判断・表現】

(3)　本時の展開　　〔　〕子供の意識　○　指導の手立て　※評価規準

過程	時間	主な学習活動	指導の手立て
思いをもつ	7	1　教師の実演を見て、本時の活動について見通しをもつ。 ・　折って切ると、面白いかざりができるね。 2　学習のめあてをたてる。 かみをおって、かさねてきってみよう。 3　半分に折ってできる飾りをつくる。 ・　紙を持っている手を動かせばいいんだね。	○　飾りづくりを実演をしながら作り方を問うことで、これまでの生活経験とつなげて考えることができるようにする。 ○　製作の注意事項を板書で示すことで、製作中に確認しながら活動することができるようにする。 ○　折り方を工夫して切ってできた作品を紹介することで、色や形、イメージに着目して見たり、想像を膨らませたりすることができるようにする。 ○　子供の試行錯誤している過程を認める声掛けを行うことで、折り方の工夫に気付いたり、製作の過程を大事にしたりすることができるようにする。
思いを表現する／自他のよさに気付く 思いをふくらます／	３３	4　いろいろな折り方で折った紙を切って飾りをつくる。 ・３回折ったよ。どんな形ができるかな。 5　全体で作品を交流する。 ・どうやったら、中にも模様ができたの。 6　交流したことを基に作品づくりを行う。 ・○○さんの真似をして、□□を作ってみたよ。 7　本時の学習を振り返る。 おりかたやきりかたをくふうすると、おもしろいかたちができるね。	※　はさみの使い方を身に付け、紙の折り方や切り方を工夫してできた形の面白さに気付き、つながる形や折り方、切り方を試しながら進んで活動している。 （活動の様子や発表） 【思考力・判断力・表現力】 ○　学習したことを振り返ることで、自分の思い付いたものを伝えるポイントをまとめることができるようにする。
新たな思いをもつ／まとめる・いかす	5	8　次時の活動を確認し、友達と交流して気付いた自分のこだわりを更に作品に表したいという思いをもつ。 ・かざりをもっと増やしたいな。 ・つながる形もつくりたいな。	○　本時の学習を振り返り、次時の活動を伝えることで、更に製作への意欲を高めることができるようにする。

平成 29 年 7 月 19 日（水）２校時　１年２組教室

１年２組　２６名　　指導者　西　郷　翔　平

本授業は、以下の検証を行うものである。

教える時間と試行錯誤させる時間を意識的に取り入れることは、子供が見通しをもって自分の製作を行う手立てとして有効であったか。

(1)　目　　標

つながる形のつくり方を理解し、自分の思いに合わせて紙を折ったり切ったりしてつながる形をつくることができる。

(2)　評価規準

つながる形のつくり方について理解し、つながる形をつくることができる。【知識・技能】

つながる部分を意識して紙を切ったり、折り方を工夫して飾りをつくったりしている。

【思考・判断・表現】

(3)　本時の展開　　〔　〕子供の意識　○　指導の手立て　※評価規準

過程	時間	主な学習活動	指導の手立て
思いをもつ	7	1　前時を振り返り、つながる飾りの作り方を共有する。 ・　紙を折って、ひらひらしていない方から切るとつながるよ。 2　学習のめあてをたてる。 つながるかざりをつくろう。	○　つながるつくり方を共有することで、本時で自分なりのつくり方に応用することができるようにする。 ○　飾りの作り方をエラーモデルを示しながら提示することで、作り方の留意点を共有することができるようにする。 ○　子供の言葉で学習のめあてを焦点化することで、意欲を高めることができるようにする。 ○　机間指導を行うことで、個々に応じた支援を行うことができるようにする。 ○　教師が実演を行う際に切り取り線を強調して示すことで、つなげる部分と切り取る部分の違いに気付くことができるようにする。 ○　鑑賞の時間を設定することで、製作の仕方に気付いたり、自分の作品の幅を広げたりすることができるようにする。 ※　つながる形のつくり方を理解し、自分の思いに合わせて紙を折ったり切ったりしてつながる形をつくっている。（活動の様子・作品） 【思考力・判断力・表現力】 ○　学習したことを振り返ることで、つくり方を共有し、理解することができるようにする。 ○　製作した作品をどうするか問うことで、次時の飾り付けへの意欲を高めることができるようにする。
思いを表現する／自他のよさに気付く　思いをふくらます／	３３	3　つながる飾りのつくり方を応用して、自分なりの飾りを製作する。 ・　中を切り抜くには折って、真ん中を着ればいいよ。 4　連結する飾りのつくり方を知り、飾りを製作する。 ・　星の形にするにはどこを切ればいいのかな。 5　全体で交流する。 ・　○○君は、同じ形をどんどんつなげているよ。 6　交流したことを基に再度製作を行う。 ・　○○君、一緒に形をつくろう。 ・　人の形をつくってみよう。	
まとめる・いかす　新たな思いをもつ／	5	7　本時の学習を振り返る。 おったところをきらないようにすると、つながるかざりができるよ。 8　次時の活動を確認し、友達と交流して気付いた自分のこだわりを更に作品に表したいという思いをもつ。	

図画工作科の「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業づくり

平成 29 年 7 月 19 日（水）３校時　１年２組教室

１年２組　２６名　　指導者　西　郷　翔　平

本授業は、以下の検証を行うものである。

自分なりの思いに合った場所を選択して作品を飾り付けする活動を取り入れることは、子供がこだわりをもって自分の製作に生かす手立てとして有効であったか。

(1)　目　　標

はさみで切ってできた形を見て、イメージを膨らませ教室や廊下を楽しみながら飾ることができる。

(2)　評価規準

はさみで切った形を見て、イメージを膨らませ教室や廊下の飾り付けを考えている。

【思考・判断・表現】

飾られた教室や廊下を見て、自分や友達の飾りや飾り付けた場所のよさや面白さについて感じている。

【思考・判断・表現】

(3)　本時の展開　　〔　〕子供の意識　○　指導の手立て　※評価規準

過程	時間	主な学習活動	指導の手立て
思いをもつ	7	1　前時を振り返り、本時の見通しをもつ。 ・　このまま持って帰るだけだとつまらないな。 2　学習のめあてをたてる。 つくったかざりをかざろう。 3　前時でつくった飾りをどこに、どうやって飾るか考える。 ・　画用紙にはって飾りたいな。 ・　紙テープにつなげたいな。 ・　両面テープで高いところに飾りたい。	○　製作途中の子供のつぶやきを拾い上げて全体で共有することで、思いや願いを高めて本時に取り組むことができるようにする。 ○　子供の言葉で学習のめあてを焦点化することで、意欲を高めることができるようにする。 ○　掲示の仕方の例を複数提示することで、自分の思いに合った掲示の仕方を思考しながら選択することができるようにする。
思いをふくらます／思いを表現する／自他のよさに気付く	３３	4　自分なりの思いをもって、飾り付けをする。 ・　○○さんの飾りは、つながる形に色も塗っていて面白いね。 5　飾りに色を付けたり、飾りを更につくったりする。 ・　中に絵を描きたいな。 ・　つながる飾りをもっとつなげたいな。 6　全体で交流する	○　飾り付けをしている子供に製作の意図を問い返すことで、より思いや願いに合った掲示の仕方や場所を考えて活動することができるようにする。 ○　色を塗ったり、中に絵を書き入れたりしてもよいことを伝えることで、更にこだわりを深めることができるようにする。 ※　はさみで切ってできた形を見て、イメージを膨らませ教室や廊下を楽しみながら飾っている。（活動の様子・作品） 【思考力・判断力・表現力】

新たな思いをもつ／まとめる・いかす	5	7　本時の学習を振り返る。 いろいろなかざりがあると、わくわくするね。 8　役割を決めて片付けを行う。	○　鑑賞の時間を設定することで、自他の作品のよさに気付くことができるようにする。 ○　学習したことを振り返ることで、製作の面白さや本題材の価値に気付き、今後の製作につながる意欲を高めることができるようにする。 ○　具体的な指示と明確な役割分担を行うことで、見通しをもって片付けを行うことができるようにする。

◆　**実践Ⅱ：表現「造形遊び」の学習活動**

図画工作科学習指導略案

平成２９年　１０月　２４日（火）　　６校時
１０月　２７日（金）２・３・４校時
３年２組２９名　指導者　下之薗　崇

本授業は、以下の検証を行うものである。（主体的・対話的な深い学びの視点）
・限られた素材や操作方法の条件下において活動する場を設定することは、子供たちの問題意識を高め、形や組合わせ方の面白さを生かしながら課題解決に向かう力を育む手立てとして有効であったか。
・製作の中で、自分の周囲の活動状況を確認する場面を意図的に設定することは、発想や表現を活性化させ、製作への更なる意欲の高める手立てとして有効であったか。

１　題　材　　クミクミックス

２　指導計画（総時数４時間）

過程	主　な　学　習　活　動　【評価規準】	時間
思いをもつ	1　題材名ボードや参考作品と出合い、学習内容を捉える。 2　題材のめあてを捉える。 切って形を変えた紙に切り込みを入れて、いろいろな組合わせ方を工夫しながら、新しい形を作り出そう。	1
思いをふくらます	3　段ボールの性質や段ボールカッターの安全な使い方を知り、材料に慣れ親しむ。 【関：段ボールを組合わせて新たな形を作り出すことを楽しんでいる。】 【技：段ボールカッターの使い方に慣れ、切る形を工夫して切り分けている。】	

思いを表現する 自他のよさに気付く	4　段ボールと用具、活動場所から、どんなことができるか、アイデアを出し合う。 【関：段ボールを組合わせて大きなものを作り出す活動に興味をもっている。】 5　切り方や組合わせ方を工夫してできた形からイメージを広げて、立体的なものをつくる。 【想：形を組合わせながらできた形を基に活動を思い付いている。】 【技：段ボールや紙を組合わせながら、切り方や組合わせ方を工夫している。】 6　中間鑑賞会を行い、段ボールの切り方や組合わせ方を工夫を見付け合いながらイメージや活動グループを広げる。 【鑑：自分や友達の作品を見せ合い、切り方や組合わせ方、見立てた発想の面白さを感じ取っている。】 7　自分やグループのイメージに合わせて作品を仕上げる。	2.5 (本時)
新たな思いをもつ	8　できあがった作品に名前を付け、友達に紹介し合うなどして、特徴を表す表現の工夫やよさ、面白さを見付け合う。 【鑑：自分や友達の作品を見せ合い、切り方や組合わせ方、見立てた発想の面白さを感じ取っている。】	0.5

３　本　時

(1)　目　標

切って形を変えた紙に切り込みを入れて、いろいろな組合わせ方を工夫しながら、新しい形を作り出す。

(2)　評価規準

○　段ボールを組合わせて大きなものを作り出す活動に興味をもっている。
【造形への関心・意欲・態度】

○　形を組合わせながらできた形を基に活動を思い付いている。　【発想や構想の能力】

○　段ボールや紙を組合わせながら、切り方や組合わせ方を工夫している。【創造的な技能】

○　自分や友達の作品を見せ合い、切り方や組合わせ方、見立てた発想の面白さを感じ取っている。　【鑑賞の能力】

(3)　指導に当たって

本題材は、手に入りやすい身近な材料である段ボールを、切り方や組合わせ方を工夫して新たな形を作り出すことを楽しむ造形遊びである。段ボールは適度な硬さがあるために、思いついたことを形にしやすい特徴がある。始めは具体的なイメージがなくても、いくつかの段ボール片を組合わせることで何かに見立てたり、それらの形同士が響き合うリズムを味わったりすることができる。また、自分の製作をしながらも、周囲の友達の作り出す造形に関心を示しながら、自然に互いのイメージについて語り合うことが期待できる。次々に段ボールを連結して活動を拡張していくだけではなく、それぞれが自分のイメージをもって中学年らしい自由で楽しい発想の視点で話し合いながら、環境や空間を作り出す中で新たな発見や学び合いが生まれていく場としたい。

「思いをもつ」過程では、前時を振りかえり、材料の特徴や用具の使い方の振りかえることで、本時の活動に見通しをもち、思いを膨らませながら、スムーズに製作に取り組めるようにする。

「思いをふくらませる」過程では、前時に教室の机上で製作した小さな作品と、体育館という大きな空間を比較させ、子供たちの発言を基にアイデアを出し合い、大きな空間に働きかけるという課題意識と意欲を高めたい。

「思いを表現する・自他のよさに気付く」過程では、段ボールという素材と切り込みを入れるという操作方法の限られた条件下で、それぞれの思いを表現できるように、前時に製作した作品を提示し、製作のポイントや友達の工夫を確認できるようにするとともに、 製作の中で、自分の周囲の活動状況を確認する場面を意図的に設定し、個人の活動からグループの活動に広げたり、互いの工夫を知ったりすることができるようにする。

「新たな思いをもつ」過程では、本時の学習を振り返り、自分や友達の気付きを話し合い、お互いのよさを認め合えるようにする。また、普段の図画工作の授業とは違う製作活動で感じた楽しさや、協働することの喜びにも触れ、今後の図画工作や学校生活に生かしたいという気持ちを高めていけるようにする。

(4)本時の展開　　〔　　〕子供の意識　　○指導の手立て　　※評価

（本時は製作から鑑賞までを一つのまとまりと考え、時数４時間を本時としてまとめます。）

過程	時間	主な学習活動	指導の手立て
思いをもつ	４５	・段ボールカッターの安全な使い方を知る。 ・段ボールの切り方を練習する。 ・切れ込みを入れて段ボールを組合わせる方法を知る。	○　掲示資料や教師の手本を見ることで、安全に使用しようとする意識を高める。 ○　机上で活動できるサイズの段ボールを準備し、教科書に掲載させている基本的な組み方のみ試させることで次時において各自が工夫して組むことを促す。
思いをもつ	7	1　前時の学習を振り返り、本時の見通しをもつ。 （・　段ボールの切り方を学習したよ。 ・　切り込みを入れると、段ボールをつなげることができたよ。） 2　めあてと本時の流れを確認する。 だんボールを組合わせて、どんなことができるかやってみよう。	○　題材名ボードや前時に製作した作品を振りかえらせ、本時の活動の見通しをもたせる。 ○　段ボールカッターの使い方を全体で確認し、安全に留意することを確認する。 ○　場の確認を行い、前時との違いを考えさせながらめあてにつなげ、子供の課題意識や製作への意欲を高める。
思いをふくらます	8	3　体育館を歩きまわり、その大きさを確認するとともに、前回の作品と比較して本時の製作のイメージをもち、どのようなことができるかアイデアを出し合う。 （・　大きい恐竜が作れそう。 ・　秘密基地をつくりたいな。 ・　体育館を公園みたいに変えたいな。）	○　場の大きさを確認する時間を取ることで、作品のイメージや製作の規模を考えさせる。 ○　空間の大きさや子供のアイデアから、共同製作を行ってもよいことを伝える。 ※　段ボールを組合わせて大きなものを作り出す活動に興味をもっている。 【造形への関心・意欲・態度】
思いを表現する／自他のよさに気付く	１００	4　自分の思いに合わせて、段ボールを組合わせて新しい形を作り出す。 （・　いつもは作れない、とっても大きなものを作るぞ。 ・　友達と力を合わせて○○を作ろう。 ・　この場所に置いたら面白いんじゃないかな。 ・　この組合わせをしたら△△に見えてきたよ。） 5　中間鑑賞会を行い、段ボールの切り方や組合わせ方を工夫を見付け合いながらイメージや活動グループを広げる。 （・　あのアイデアまねしたいな。 ・　ぼくの作品と合体してみない。 ・　一緒の場所にかざろうよ。） 6　作品を仕上げる。	○　様々な大きさの段ボールを準備し、子供の思いに合わせて選択できるようにする ○　場所や材料の特徴を生かして高く積み重ねたり、長く並べたり、友達と協力したりして発展的に活動が展開されるように助言していく。 ※　形を組合わせながらできた形を基に活動を思い付いている。 【発想や構想の能力】 ※　段ボールや紙を組合わせながら、切り方や組合わせ方を工夫している。　【創造的な技能】 ※　自分や友達の作品を見せ合い、切り方や組合わせ方、見立てた発想の面白さを感じ取っている。 【鑑賞の能力】 ○　質問グループと説明グループに分け相互鑑賞を行なうことで自他のよさに気付かせる。 ○　中間鑑賞後に、共同製作の規模を広げてもよいことを伝える。 ○　作品の名前（テーマ）をグループで考えさせることによって、作品の完成に向けての思いを共有できるようにする。

新たな思いをもつ	２０	7　作品に名前をつけて、発表会を行う。 （・　ぼくは、〇〇をイメージして、こんな作品を作りました。 ・　私たちの作品の題名は△△です。工夫した所は・・・というところです。） 8　自由に作品を見て回り、友達の作品のよさや見付けた工夫を発表する。 9　授業の感想を発表し合い、今後の図画工作の活動や学校生活に生かせるようにする。 10　片付けを行う。	○　作品への思いやこだわりを発表する場を設定し、互いのよさを認め合えるようにする。 ※　自分や友達の作品を見せ合い、切り方や組合わせ方、見立てた発想の面白さを感じ取っている。 【鑑賞の能力】 ○　十分に鑑賞させた後は、写真に残し、活動の足跡として教室に掲示する。 ○　段ボールはリサイクル倉庫に整理する。

◆　**実践Ⅲ：表現「立体に表す」の学習活動**

図画工作科学習指導略案

平成２９年 １１月 １６日（木）　　２校時
１１月 ２４日（金）１・２・３・４校時
３年２組　２９名　指導者　下之薗　崇

本授業は、以下の検証を行うものである。
「見える図」を用いて、思いから生まれた発想を整理することは、自分のイメージをふくらませ、表現につなぐための構想を練ることができるようにする手立てとして有効であったか。

１　題　　材　粘土から形に「生き物ねんどランドへようこそ」

２　指導計画（総時数５時間）

過程	主な学習活動　【評価規準】	時間
思いをもつ	1　自分が形にしたい生き物について思いをふくらます。 2　学習のめあてを捉える。 ねんどのくふうを生かして、イメージしたことを、動き出しそうな立体に表そう。 3　作品例を見て、つくった友達が伝えたかった生き物のわくわくするようなかっこよい感じや美しさ、それが伝わるようにどんな工夫があるか話し合う。 【関：自分のつくりたい生き物の形を考え、粘土でつくることを楽しみにしている。】	1
思いをふくらます	4　つくりたい生き物の動きが見る人に伝わるように、「見える図」を使って、ふくらませた発想を整理して構想を練る。 【想：どんな形で表したら動いている感じが伝わるか想像したり考えたりしている。】	

思いを表現する／自他のよさに気付く	5　つくりたい生き物の芯材をつくる。 ・変形ペットボトルの形をもとに形や動きの発想を広げる。 ・ペットボトルと新聞紙を包んだアルミホイルを芯材にして形や動きをつくる。 6　芯材を粘土でおおい、おおまかな形や動きをつくる。 【技：粘土の特徴を生かして、自分のつくりたい形や動きが表れるように工夫している。】 7　つくりたい生き物の様子や動きが伝わるように表現の仕方を研究する。 【技：粘土ベラや使いたい道具を使って、発想したことを工夫して表現しようとしている。】 8　表現の途中で互いの作品を鑑賞し合い、自分の表現に生かす。 【鑑：自分や友達の作品を見せ合い、よさを感じている。】	2 1．5
新たな思いをもつ	9　作品カード（生き物紹介カード）を書き、互いの工夫やよさを話し合う。 【鑑：自分や友達の絵を見せ合いながら、表したかったことについて話し合っている。】	0．5

3　本　時（1／5）

（1）　目　標

つくりたい生き物の様子や動きが見る人に伝わるように発想をふくらませ、表現に生かすための構想を練る。

（2）　評価規準

○　自分のつくりたい生き物の形を考え、粘土でつくることを楽しみにしている。

【関心・意欲・態度】

○　どんな形で工夫したら自分の表したい感じが伝わるか想像をふくらませている。

【発想や構想の能力】

（3）　指導に当たって

本題材の学習では、これまでに子供たちは、つくりたいものの特徴を想像し、紙粘土や芯材を用いて立ち上がった立体として表す製作活動を行っている。また、土粘土のかたまりからつまみだしたり付けたりして形をつくる経験もある。そこで、自分の広げたイメージに合うような生き物を、土粘土と芯材、自然の材料を使って、感じが伝わるように工夫して立体に表す活動を体験できるようにする。

「思いをもつ」過程では、二つの作品を比べ、わくわくするような迫力がある作品には、思いを伝えるために工夫があることを知り、試してみたいという思いをもつことができるようにする。

「思いをふくらます」過程では、 自分のつくりたい生き物について考え、発想を広げることができるように、わくわくするような迫力を表すための工夫について話し合うようにする。そのときに、実際に土粘土の質感を感じることができるように、試しの粘土も準備しておく。

「思いを表現する／自他のよさに気付く」過程では、発想したことを表現するために、どのような工夫ができるかを考え、考えたことを「見える図」を用いて表し、構想を練ることができるようにする。また、みんなでかっこよくする工夫を出し合い黒板に整理して残すことで、考えを共有することができるようにする。

「新たな思いをもつ」過程では、学習を振り返る中で、友達や自分のよさを感じ、新しい考えや表現方法を取り入れたり、自分の考えに自信をもったりすることにつながるようにする。そして、今後の活動の見通しをもち、今後の製作活動への意欲を高めることができるようにしていく。

（4）本時の展開（1／5）　　〔　　〕子供の意識　○指導の手立て　※評価

過程	時間	主な学習活動	指導の手立て
思いをもつ	8	1　二つの作品を比べて、気付いたことを話し合い、本題材の学習について知る。 ・Aは、獲物を狙っている感じがするよ。 ・Bは、歩き出しそうな気がするよ。 ・AもBも思いがありそうだね。 2　本時のめあてを話し合い、学習の流れを確認する。 ねんどのくふうを生かして、イメージしたことを、動き出しそうな立体に表そう。	○　二つの作品例を提示し比較することで、高さの工夫や中心になるところを詳しく表すよさにも気付くことができるようにする。 ○　どちらの作品にも共通して、思いを伝えるために工夫があることを知り、試してみたいという思いをもつことができるようにする。 ○　作品製作の見通しをもつことができるように、本題材の学習計画について確認する。 ○　子供たちの発表を中心に、キーワードを板書し、自分のめあてを考えられるようにする。
思いをふくらます思いを表現する／自他のよさに気付く	３０	3　自分がつくってみたい生き物を紹介し合う。 ・口を大きく開けた恐竜をつくろう。 ・ライオンに翼をつけてみようかな。 4　迫力を伝えるための工夫について話し合う。 形の工夫 動きのある形　詳しく見た形　模様 5　グループ用の試しの粘土で、道具や材料を使って、はく力を表すための工夫を試してみる。 6　自分がつくりたい生き物のかっこよさを伝えるためのアイデア計画書をつくる。 表したいイメージ―形―使う材料や道具 7　かっこよい感じを出すために、工夫しようとしたことを出し合い、考えを共有する。 ・足を粘土のかたまりでどっしりとつくりたいな。 ・ゴツゴツした感じがでるように、粘土ベラを使って毛の模様を付けたいな。 ・大きく開いた口の中の歯にドングリを使いたいな。 8　本時の学習を振り返る。 表したい感じが伝わるようにするためには、形や動き、もようを工夫するとよい。	○　つくってみたいと思う生き物について、自分の思いとつなげながら考えることができるようにする。 ○　自分が表したい生き物について、どこを工夫すると思いを表せるのか気付くことができるように、導入で比べた作品例での工夫の部分をアップにした写真を準備する。 ○　粘土の質感を思い出したり簡単に試したりして話し合うことができるように、試しの場を設定し、製作への思いをふくらますことができるようにする。 (グループ用粘土、粘土板、粘土ベラ、自然材) ○　自分のつくりたい生き物について、ふくらませた思いを整理し、それらのイメージを表現するためにどのような工夫ができるかを「見える図」にまとめ、発想と構想を関連付けて考えることができるようにする。 ※　どんな形で工夫したら自分の表したい感じが伝わるか想像したり考えたりしている。 (ワークシート・活動) ○　積極的に表したい工夫を書いている子どもには、表したいイメージとつながっているか、形の視点を確認しながら進めていくように伝える。 ○　活動が停滞している子には、かっこよさを伝える工夫で出てきた言葉を参考にして考えることができるように言葉掛けをする。 ○　振り返りの視点カードを使って、本時の活動や気付いたことなどを振り返り友達や自分のよさを感じられるようにする。

新たな思いをもつ	7	9　友達の考えを聞いて、新しく加えたい考えや思いついたことなどを書き入れ、次時の学習を確認することで、作品製作への新たな思いをもつ。 かきたいことの思いがつたわるように絵の具のひみつを調べよう。	○　新しく加わった考えや思いついたことは、青色で書き込むようにさせ、活動を通して再構築された自分の考えが分かるようにする。

4　芯材作成から粘土を使っての表現の流れ（肉付けまで）（２・３／５）

過程	時間	主な学習活動	指導の手立て
思いをもつ	１０	1　前時のアイデア計画書を振りかえり、今後の見通しをもつ。 ・　するどいきばがある恐竜をつくるぞ。 ・　元気でかわいいねこの友達がほしいな。 2　参考作品から芯材（骨組み）の重要性を知る。 3　本時のめあてを話し合い、学習の流れを確認する。 ペットボトルの形と自分の思いをつないで、ほね組みを作ろう。	○　アイデア計画書を振りかえり、製作への思いを想起させる。 ○　製作の見通しをもつことができるように、本題材の学習計画について確認する。 ○　動きから作品のイメージをしやすい参考作品を用意する。 ○　子供たちの発表を中心に、キーワードを板書し、自分のめあてを考えられるようにする。

思いをふくらます思いを表現する／自他のよさに気付く	７０	４　自分がつくってみたい生き物の動きを考えて芯材のペットボトルを選ぶ。 ・体を曲げた感じにしたいからこのペットボトルを使おうかな。 ・このペットボトルの形が面白いから、最初とはちがう動きを思いついたぞ。 ５　ペットボトルと手足となる芯材を組合わせて形をつくる。 ・手と足の長さはどのくらいにしようか。 ・どうやったら、足を曲げた感じになるかな。 ・このペットボトルの形が面白いから、最初とはちがう動きを思いついたぞ ６　粘土で大まかな肉付けをする。 ・どうやったらうまく付けられるかな。 ・体に粘土を付けすぎて立たなくなったよ。 ・バランスが難しいな。 ・芯材によく付けないと取れてしまうよ。 ・頑丈に作りたいな。	※　どんな形で工夫したら自分の表したい感じが伝わるか想像したり考えたりしながらペットボトルを選んでいる。 ※　見える図で整理した表したい生き物の姿を想像しながら、ペットボトルと芯材の組合わせを考えている。 ○　積極的に表したい形を考えながら選んでいる子供には手足とのバランスも考えながら進めていくように伝える。 ○　活動が停滞している子には、ワークシートの自分の思いを振り返りながら、動きと形に着目させ選ぶように助言する。 ○　子供たちのつぶやきをもとに、芯材に粘土を付ける際の注意点を共通理解させる。 ○　子供たちの活動から、うまく立たせるためにはどのような順番で付ければよいか考えさせる発問を行なう。 ○　必要に応じて新聞紙やペットボトルを支えとして使用してもいいことを伝える。 ○　骨組みを作る際に見付けた形の面白さから発想を広げている子供を称賛する。 ○　粘土の付け方を工夫したり、表現を工夫したりしている子供を紹介する。
新たな思いをもつ	１０	７　本時の学習を振り返る。 ほね組みには、しっかりねんどをつけていくとこわれにくくなる。 ねんどは足からつけていくとバランスがとりやすい。 ８　次時の活動を知る。	○　次時では、第一時で見付けた粘土の工夫を生かし、細部を作っていくことを伝える。

5　作品の仕上げ（細部）から鑑賞までの流れ（４・５／５）

過程	時間	主な学習活動	指導の手立て
思いをもつ	１５	１　前時までの活動を振りかえる。 ・１時間目のねんど体操でいろいろな工夫ができたよ。 ・ねんどを立たせるのが難しかったな。 ・早く仕上げたいな。 ２　本時のめあてを話し合い、学習の流れを確認する。 ねんどのくふうを生かして、自分が考えた生き物に命をふきこもう。 ３　中間鑑賞会を行ない、それぞれの作りたい生き物の紹介や質問を行なう。 （こだわりみっけタイム）	○　板書を振りかえりながらこれまでの製作を想起させる。 ○　製作の見通しをもつことができるように、本題材の学習計画について確認する。 ○　子供たちが主体的に活動できるように、子供の発言を生かしながら、やってみたいと思えるめあてを全体で作り上げる。 ○　ワークシートを基に、自分の考えを説明したり、質問･アドバイスを行なったりすることで、製作のイメージを明確にしたり、友達のよいところを取り入れたりできるようにする。
思いをふくらます思いを表現する	５５	４　道具の確認と「どべ」の使い方を知る。 ・あの道具を使ってみたいな。 ・どべを使ったら修理できそうだ。 ・ぼくの作品ではあの道具が使えるかも。 ５　自分が作りたい生き物の細部を作り、作品を仕上げる。 ・とげとげをいっぱい付けて強くしたいな。 ・へらで細かい模様を付けていこう。 ・友達のアドバイスを使って、少し変更してみようかな。	○　用具の確認や、どべの使い方を紹介し、製作に生かすよう促す。 ○　第一時の活動からどんな工夫が出来るのか発表させる。 ※　へらや竹串、かきべらや切り糸などの用具なども用いながら表し方を工夫している。 ○　手や指、用具を使いながら積極的に表現している子供には、他の道具を紹介したり、他の友達の表現も参考にするようにアドバイスする。 ○　活動が停滞している子には、ワークシートの自分の思いを振り返りながら、用具による様々な表現例を紹介する。
自他のよさに気付く	１５	６　作品鑑賞会を開く。 ・○○君の作品がすごく迫力があっていいと思いました。 ・○○さんの作品は、細かいところまで工夫していてとてもきれいです。 ・○○君の工夫を今度ぼくもやってみたいです。	○　グループ鑑賞会を開き、友達のよいところをワークシートに書き込ませることで友達の表現に気付くようにする。 ○　全体鑑賞を行ない、多様な表現を見付け合うことで、自他のよさに気付くことができるようにする。
新たな思いをもつ	５	７　本時の学習を振り返る。 細かいところまで形の工夫をすると、自分が考えた生き物が生き生きしてきたよ。	○　前学年までの粘土の活動も想起させながら、単元の感想を発表し合う。

Ⅲ．結果と考察

実践の結果について、筆者らと指導者で考察し、前章Ⅱの研究方法における（1）～（3）の要点と工夫が、いかに有効であったかを項目毎に検証する。

1．題材「チョキ チョキ かざり」について

（1）“主体的な学び”を実現する要点と工夫の効果

① 段階的な学びに留意し、児童の興味や関心、実態を踏まえ課題設定する

本題材は、教科書・ずがこうさく１・２上（日本文教出版）に示されている同名の題材を参考にした。第一時では、自分なりに飾りづくりを楽しむ姿が見られたが、既習経験の有無で製作の姿や作品の出来にかなりの幅が見られた（図１、２）。この題材は幼児期においても取り扱う傾向がある。なかなか難しいが指導者は育成すべき資質や能力の他に、幼児期との違いや１年生で学ぶ意味をより認識しておく必要があろう。

② 課題解決への効果的な意欲付けをするため、児童の心を動かす導入を行う

第一時の導入における飾りづくりの実演は、視覚的な理解を促したとともに、折って切ることの楽しさを伝えたことで造形意欲を高められたようだ。ただ、上記①の実態があったことから、多数の子供たちが作り方をよく理解できずにバラバラになってしまった。意欲付けは有効であったが、気持ちだけが先行して理解がともなっていない状況が見受けられた。

③ 見通しを持って前向きに取り組めるよう、おおよそのゴールを伝える

全三回の活動における第二時に、教育実習生を迎え入れるための飾り付けに作品を使用するという目標を定めたことで、最後まで製作と飾り付けに対しての意欲的な姿が見られた。個人の見通しに加え、全体的な活動におけるクラスのゴールが設定されたことでモチベーションがより高まったと感じた。

④ 学びの意味付け・価値付けをするため、振り返りでは言語活動を充実させる

最後の第三時で、活発な発表による鑑賞を行えた事で自己や友達の作品の良さを理解し、充実した製作活動が認識されたと推測する（図３）。

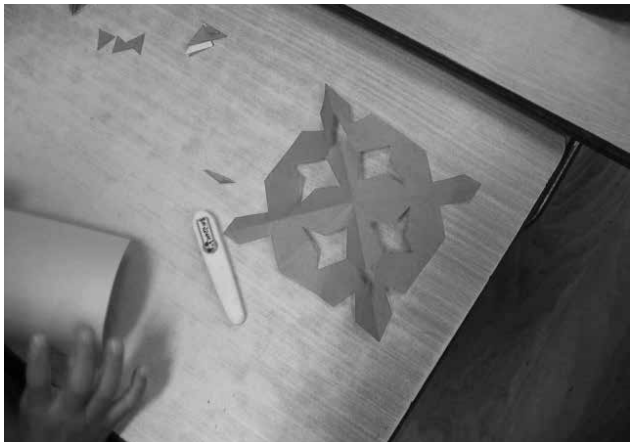

図１　切り紙製作を経験済みの児童の作品

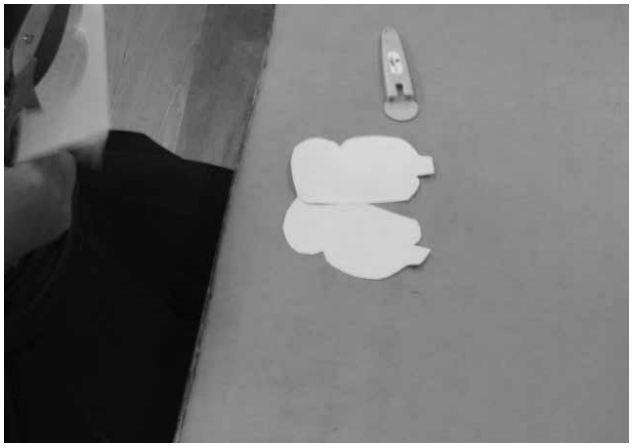

図２　ちょうちょがバラバラになった様子

図３　振り返りの鑑賞会

（2）“対話的な学び”を実現する要点と工夫の効果

①　課題解決のため、モノや技法と対話する場を十分に確保する

第一時から、適切な教材（図４）と場所、時間などを設定したことで手を通した十分な試行錯誤ができたと感じる。ただ残念なことに前述の（１）-①②の結果になってしまい、途中でどのように作ったらいいのかがわからなくなり、手が止まる姿が見られた。導入の意欲付け直後に、作り方と注意点を板書で説明したはずだが、視覚的にも作り方の基本をしっかりと伝えられるような工夫があると良かった。

②　自己との対話を深めるため、手や身体を通して思考することの大切さを伝える

製作中、指導者が個別に適切な言葉がけを行った事で、出来た形から見立てを楽しむ様子や、根気強く何度も取り組む姿が見られた（図５）。

③　他者との学び合いを重視し、有効的な対話の場面を設ける

第一時の途中では、半数で交代して鑑賞会（図６）を行ったり、振り返りでは作品をOHPで拡大して発表（図７）させたりすることで、友達の作品の良さや発想の面白さ、作り方の工夫を知り、その後の製作に生かされていた。

図４　異なる色・大きさの折り紙と色画用紙

図５　イメージを基に根気強く取り組む姿

図６　中間の鑑賞会

図７　OHPを使用し，視覚的に理解を促す様子

（3）“深い学び”を実現する要点と工夫の効果

①　課題解決に向け、学びの質を高めるために発想・構想・創造のプロセスを改善する

１年生の活動においては、改善というよりも基本的な発想・構想・創造のプロセスを大切にすべきではないかと考える。この度は、課題を自分のこととして捉え、自問自答しながら自己決定していく姿勢を支えるような個々に

合った関わり方に努めた。そのため学習のめあてから多少外れていたとしても、製作過程や作品から、その子らしさが感じられたら、認めたり褒めたりすることで、次の製作に前向きになっていた。

② 図画工作科で育成すべき資質・能力の「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力、人間性等」を相互に関係付けて育成するため、造形的な「見方・考え方」を働かせる場面を効果的に設定する

前述の（２）-③の通り、作品や作り方に対する様々な見方や感じ方を認め合える場を設定したことで、その後の製作に生きたと推測する。更に、子供たちの飾り付けの様子を見ていたところ、作品の貼り方や向き、他の作品との組み合わせ方などで新たな「見方・考え方」を生みだしていそうな姿を見つけた（図８）。低学年ではまだ難しいと予想されるが、今後は、作品の良さや工夫を確認しながら、飾り付けの良さや面白さが理解し合える鑑賞にも取り組めると、「見方・考え方」の学びをより深められるのではないか。

③ 製作に対する柔軟性や汎用的能力に結びつけるため、造形的な「見方・考え方」を働かせることの面白さ・豊かさ・大切さを伝える

指導者が子供の柔軟な発想や見立てを認めつつ（図９）、異なる見方も伝えたことで多様な感じ方と創造性を育むことにつなげられたと考える。

④ 学びが実感できるよう、一方向の授業の流れではなく、必要に応じて行ったり戻ったりする学習過程を大切にする

第二時の導入では、もともと作り方の解説をする予定はなかったが、第一時で必要性を感じて臨機応変に入れ込んだ。先の略案は事後にまとめたものである。ここでのタイミングと間近な距離で解説したことから、その後は作品がバラバラにならず、つながりを意識した形が見られ、改善がはっきりと見て取れた（図10、11）。

図８　場所や周りの飾りを意識して貼る姿

図９　サンタクロースのひげに見立てる姿

図10　第二時、作り方を再説明する様子

図11　作り方を十分に理解した様子

図12　完成した飾り付け

本活動の良かった点や課題点は先の通りであるが、飾り付けを眺めてみて明らかなことは、切り紙の型にはまったような飾りだけではなく、それぞれの子供の個性や、試行錯誤の跡を感じられるようなものが多数出来上がった、ということである（図12）。このことは、第一時に作り方の基本が十分に理解されず、自由な発想での製作が優先してしまったことが影響しているであろう。各略案の冒頭の検証は厳しい部分があるものの結果的には各々が手を通した思考の後、第二時に基本の作り方を再理解したことが、良かったのではないかと考える。

2．題材「クミクミックス」について

（1）“主体的な学び”を実現する要点と工夫の効果

① 段階的な学びに留意し、児童の興味や関心、実態を踏まえ課題設定する

本題材は、教科書・ずがこうさく３・４上（日本文教出版）に記載されている同名の題材である。第一時の導入において、子供たちは馴染みのある段ボールの素材性と、切って組み合わる作り方に対して興味津々であった。また、初めて使用する段ボールカッターに対しても早く使いたい様子が見受けられた。

② 課題解決への効果的な意欲付けをするため、児童の心を動かす導入を行う

子供たちは段ボール自体と作り方に興味・関心を抱いていたため、第二時の導入では主に作り方の確認と安全面の注意を伝えただけで、後は段ボールに吸い付けられるように夢中で関わりながら、造形遊びへのイメージを膨らませていった（図13）。

③ 見通しを持って前向きに取り組めるよう、おおよそのゴールを伝える

第二・三・四時の継続した活動の中で、指導者がタイミングを計りながら共同製作や出来上がったものを組み合わせる造形遊びを全体に促した。子供たちは周囲の状況を見ながら、各自がゴールへの見通しをもって積極的に取り組めていた。

④ 学びの意味付け・価値付けをするため、振り返りでは言語活動を充実させる

最後の振り返りの場面において、作品への思いやこだわりを発表する場を設定することで、互いの良さ（発想の面白さ・切り方・組み合わせ方）を認め合い、今後の授業や学校生活に生かすことにつなげられたようだ。

図13　友達と協力して段ボールを切る姿

（2）“対話的な学び”を実現する要点と工夫の効果

① 課題解決のため、モノや技法と対話する場を十分に確保する

第二時、普段の教室よりも広いオープンスペースに移動し、色々なサイズや形の段ボールに接したことで、更に製作意欲が高まったようだ。子供たちは全身で素材を感じ、試行錯誤をしながら伸び伸びと造形遊びを楽しんでいた（図14）。第三時には、指導者が段ボールを追加したことで、それぞれの製作が更に充実していった。

② 自己との対話を深めるため、手や身体を通して思考することの大切さを伝える

指導者は、子供の思考する様子を認めながら、イメージをより造形化するために「どのような部分を作り足したらいいか」「どういう工夫をしたら、自立できるか」などの具体的な声掛けをすることで、更に思考を促した。また段ボールの中に入ったり、寝転がったりしてイメージする姿を認め「どのような気持ちか」「どのようなイメージが湧くか」「その中から、外はどんな感じに見えるか」などと聞き、全身での感覚を生かせるような発想を引き出すことに努めた。このことにより、自己決定を楽しみながら大型の作品づくりにつながっていった。

③　他者との学び合いを重視し、有効的な対話の場面を設ける

「学びに向かう力」を意識して、第三時の活動が進んだ頃合いを見計らって、中間鑑賞を入れた（図15）。友達の作品の良さや面白さ、作り方を確認できたうえ、自己の作品を客観的に見れたことで、その後の活動がより充実したと感じる。

図14　段ボールの中で造形遊びを楽しむ様子

図15　中間鑑賞会の様子

（３）“深い学び”を実現する要点と工夫の効果

①　課題解決に向け、学びの質を高めるために発想・構想・創造のプロセスを改善する

今回の設定の中で特に配慮した点は、表現過程の中に鑑賞活動（ぐるぐる展覧会・こだわり発表会）を効果的に取り入れたことである。このことが、子供たちの発送・構想・創造のプロセスを適度に後押しできたようだ。

②　図画工作科で育成すべき資質・能力の「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力、人間性等」を相互に関係付けて育成するため、造形的な「見方・考え方」を働かせる場面を効果的に設定する

この造形遊びは、段ボールと段ボールカッターのみを使用するため、どのような展開になるかが気がかりだったが、驚くばかりの造形的な「見方・考え方」が働き、魅力的な作品が生まれた。例えば、図16の戦車では、段ボールをまるめて穴に差し込むことで大砲にしたり、図17の飛行機では羽の部分を動かせるようにしたり、図18の高さに挑戦したタワーでは、縦横に組み合わせることで強度を高めたりと個性的な作品が多数見受けられた。筆者らは、この結果につながった大きな要因を、材料と道具の制約ではないかと考える。限られたものの中で造形しなければならないので、逆に頭を使って自分なりの工夫ができたのであろう。得てしてテープを準備しがちになるが、そうすると接着が簡単にできて試行錯誤が限られてくるので、今回のような充実した「見方・考え方」にはつながらなかったかもしれない（図19、20、21、22）。このような作り方は一切教えておらず、作り方の説明も基本的なところに留めたことが功を奏したと言える。

③　製作に対する柔軟性や汎用的能力に結びつけるため、造形的な「見方・考え方」を働かせることの面白さ・豊かさ・大切さを伝える

（３）-②の様子に加え、図23や24に見られるおままごとを楽しむ姿も指導者が認め、感じたことを伝えたことで、子供たちは更に豊かな創造世界を広げていった。

④　学びが実感できるよう、一方向の授業の流れではなく、必要に応じて行ったり戻ったりする学習過程を大切にする

本活動は、子供の主体性が生かされながら、予想を上回る充実した展開であった。後半においても、全体的に製作意欲が感じられたことから特別な変更は必要なかった。

図16　完成作品「戦車」

図17　完成作品「飛行機」

図18　試行錯誤して高いタワーを作る様子

図19　テープの代わりに小片を刺して成形

図20　筒型に丸めたものを差し込む姿

図21　段ボールの切り込みを生かし組合わせる姿

図22　棚部分と壁を利用し、お城を作る様子

図23　作った猫の世話を楽しむ姿

図24　作った下駄箱で上履きの出し入れを楽しむ姿

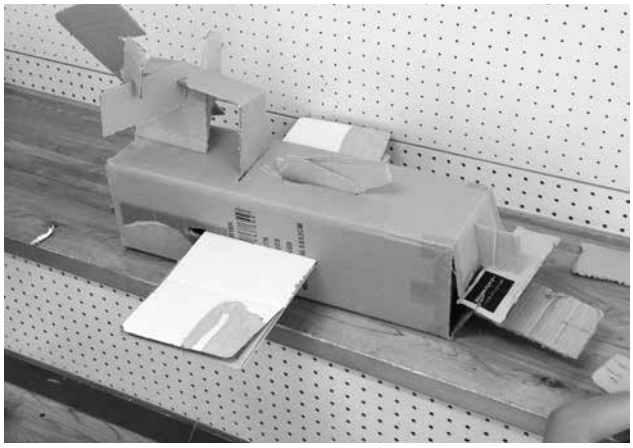

図25　完成作品「飛行機」

図26　完成作品「道」

図27　製作中の「ヘリコプター」

図28　グループでの完成作品「秘密基地」

ここでの検証は、先に述べた通りでほとんどが有効であったことが明らかになった（図25、26、27、28）。多くの良かった点が目立ち、敢えて課題点を挙げるとすれば、造形遊びの場合は適切な評価の仕方が課題になると考える。出来上がった作品や製作過程だけでの評価では、指導者が的確に計り知れない部分があることから、活動後に自己評価カードのようなもので表現内容・作品の完成度・工夫した点などを振り返り、その後の活動に生かすことも重要になってくる。また造形遊びは試行錯誤を繰り返しながら、個々の活動が進んでいくことが多いことから、十分に声掛けをしながら状況を把握し、適切な評価につなげていくことも必要であろう。

３．題材　“粘土から形に「生き物ねんどランドへようこそ」”について

（１）“主体的な学び”を実現する要点と工夫の効果

①　段階的な学びに留意し、児童の興味や関心、実態を踏まえ課題設定する

子供たちは、これまでに棒状の新聞紙をアルミホイルで包んだものを骨組みとして、作品づくりに取り組んできた。骨組みを用いることで、イメージに合った形が作りやすいことや作品が頑丈になることを学び、その利点と必要性を理解してきた。本活動では、ペットボトルをバーナーで熱して適度に変形させたものを骨組みの教材に加えたことで、子供たちの興味や関心を引きつけられたように思われる（図29）。初めの段階では、設定は適切な印象であった。

②　課題解決への効果的な意欲付けをするため、児童の心を動かす導入を行う

第一時の導入時、２つの作品例（図30、31）を示し、気付いたこと（動き・形のくふう・思いやねがい）を発表し合ったことで、表現への欲求が高まったと感じた。ただし参考の作品は、以前の４年生が作ったものであることから、３年生にとっては若干目標が高く感じられた部分があったかもしれない。また、その作品の中の骨組みついては、今回のようなペットボトルを使っていないことから、骨組みと形体の関係性については視覚的な理解につなげにくかった。本活動に対して、ベストな参考作品ではなかったであろう。

③　見通しを持って前向きに取り組めるよう、おおよそのゴールを伝える

第一時の導入で、学習計画について説明されたことで全体の流れとゴールが掴めたようだ。また学習のめあてに関して、第一時は各自のめあてを考えさせたり、第二時では子供たちから出た意見を採用し、板書の学習のめあてに記入したことで、子供の主体性を引き出せたようであった。本題材は３年生にとって多少困難な課題ではないかと予想していたが、このような工夫によって最後まで粘り強く取り組むことができたと感じる。

④　学びの意味付け・価値付けをするため、振り返りでは言語活動を充実させる

最後の第五時での振り返りでは、まずグループ鑑賞会を開き、友達の良い点をワークシートに書き合うことで、自己の作品や製作を客観的に評価できていた。またその後の全体鑑賞会においては、多様な表現や自他の良さを確認できたことで、２回の言語活動による振り返りとなり、学習活動の意味付けと価値付けがしっかりとできたと推測する（図32）。

図29　バーナーで変形させたペットボトル

図30　参考作品Ａ

図31　参考作品Ｂ

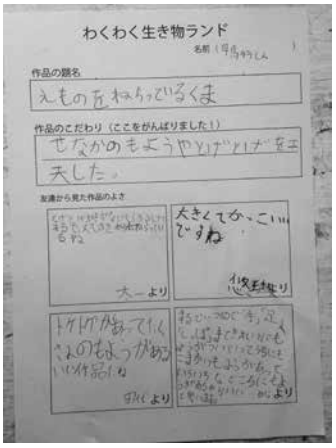

図32　振り返り時のワークシート

（２）“対話的な学び”を実現する要点と工夫の効果

①　課題解決のため、モノや技法と対話する場を十分に確保する

骨組みづくりまでは順調に進んでいたが、粘土での製作に入ると、粘土の重さを新聞紙の芯材が支えきれなくなり、余りのペットボトルや粘土べら、割り箸等で補強する姿が見られた（図33）。更に、一部の子供ではあるが“どべ”の触感に引き付けられ、全体をツルツルに撫でてしまったことで、粘土が柔らかくなりすぎてペットボトルから外れたり、部分的に崩れてしまい作り直すことになった（図34）。そして骨組みの接着はビニールテープを使っており、水分に特別強いわけではないため、骨組みのテープ貼りからやり直す姿もみられた。本来、骨組みは補強の役割で製作を安定して進めるためのものであることから、ここでの骨組みは粘土との十分な対話を保障できたとは言えない。

②　自己との対話を深めるため、手や身体を通して思考することの大切さを伝える

上記の（２）-①に課題点を述べたが、学習のねらいを踏まえた時間数と段階的な活動の内容・流れは問題なかったと思われる。子供たちが骨組みや粘土に向き合う場は十分に確保され、道具を渡すタイミングもしっかりと配慮されていた（図35）。ただし、粘土の肉付けから仕上げにかけて、どうしても道具の使用が増え、表面的な処理の面白さに偏った感じがある。３年生特有の特徴であるが、本来、子供たちには手を道具のように使いながら試行錯誤することを重視するよう導いていきたい。粘土に直に触れることが、粘土製作の根本であり、触感を通して発想・構想・創造が豊かに展開され、作者の思いを込めやすくなることも併せて伝えなければならないと考える。

③　他者との学び合いを重視し、有効的な対話の場面を設ける

各時間の振り返りにおいて、学びを深めることができたと感じる。第一時では、発表を聞くことで得た新たな考えや思いつきをワークシートに青色で書き込ませ、自己の考えが発展したことを自覚させられた（図36）。第二時では、骨組みで工夫した点を発表させ（図37）、第三時では、指導者が粘土の付け方や表現の工夫をしている作品を紹介した。更に第四時になると、作品を見て回る中間鑑賞会が有効であったうえ、第五時では最後の作品鑑賞会で十分にまとめられた。これらの積み重ねが大変効果的で、友達との学び合いが各々の「学びに向かう力・人間性」を高めた印象を受けた。

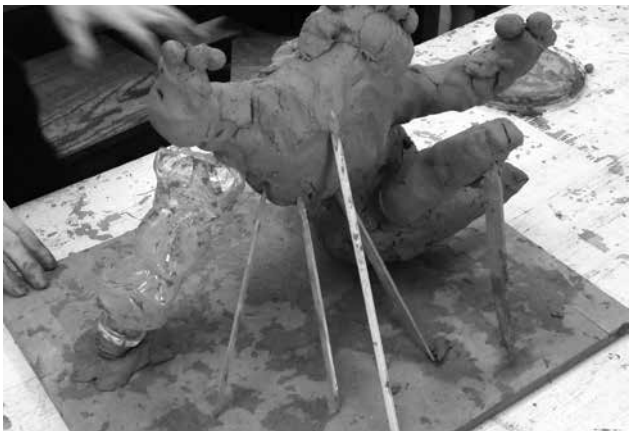

図33　ペットボトルや粘土ベラで作品を支える様子

図34　“どべ”の使い過ぎで尻尾が崩れ、作り直す姿

図35　手作りのかき出しベラ

図35　粘土ベラとストロー等

図36　ワークシート「見える図」の内容

図37　他者との学び合いのため、工夫した点を発表する姿

（３）“深い学び”を実現する要点と工夫の効果

① 課題解決に向け、学びの質を高めるために発想・構想・創造のプロセスを改善する

第一時のワークシート「見える図」を用いて、発想・構想・創造につなげる手だては、先の２つの授業実践にはないプロセスである。近年、図画工作科においても言語活動を積極的に取り入れる傾向があることから、題材によってはこのような導入の在り方も考えていかなければならないであろう。ただし、この度の子供たちの様子を観察していたところ、上手く活用できる子とそうでない子がはっきりしているし、そこでの考えが製作に反映されているかと言うと必ずしもそうとは限らない。そのため、略案の冒頭にある主な検証は現段階では有効ではなく、「見える図」の取り扱いは前向きに改善していかなければならない。

② 図画工作科で育成すべき資質・能力の「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力、人間性等」を相互に関係付けて育成するため、造形的な「見方・考え方」を働かせる場面を効果的に設定する

ここでは一斉指導に限って述べると、まず第一時では学習のめあての確認後、各グループで試しの場を設定し、粘土や粘土ベラなどで試作したことで、造形的な「見方・考え方」につながってくる素材感や発想を多少なりとも得られたのではないか。そして、道具の使い方に関する「見方・考え方」で理解を促したことは、生き物のリアルさや迫力を粘土で工夫するうえで多いに役立ったであろう（図38）。

③ 製作に対する柔軟性や汎用的能力に結びつけるため、造形的な「見方・考え方」を働かせることの面白さ・豊かさ・大切さを伝える

「見方・考え方」についての主な要点は、変形のペットボトルをいかに「見方・感じ方」を働かせて見立てられるか、ということであった。骨組みづくりの段階では、多数のペットボトルが用意され、指導教員の適切な全体への説明と声掛けの「見るだけでなく、触ってみてください」があったので、選ぶ時間が短かったわりに、イメージに合う形を選び易かったのであろう。ほとんどの子供が１個の容器を胴体部分に使っていたが、５名の子供は容器を組み合わせて大き目の骨組みを作っていた。手足となる芯材（新聞紙を棒状にしてアルミホイルで包んだもの）がビニールテープで取り付けられると、生き物の迫力が感じられる全体的な骨組みが出来上がった（図39、40）。また製作中、グニャグニャのペットボトルを手で触りながら色んな角度から見て、動きやポーズに生かすよう声掛けがあったので、子供たちは色んなイメージを膨らませながら見立てを楽しんで形づくっていたようだ。第五時の最後の振り返りでは、ペットボトルの形が様々な生き物の姿に変わったことを全員で確認したことで、「見方・感じ方」の面白さや豊かさ、大切さを伝えられたと考える（図41、42、43、44）。

④ 学びが実感できるよう、一方向の授業の流れではなく、必要に応じて行ったり戻ったりする学習過程を大切にする

仕上げの段階で子供たちが“どべ”の使い方を間違えていたので、タイミングを見て再度説明したところ適切な接着に使えるようになった（図45）。“どべ”や道具類の使用は、十分に理解を促したつもりでも偏った使い方になりやすいため、様子を見ながら繰り返しの説明が必要になるだろう。

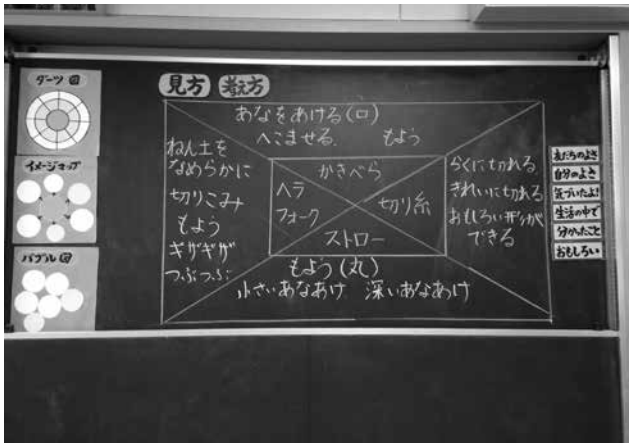

図38　道具使用に関する「見方・考え方」の板書

図39　２個のペットボトルを組み合わせた骨組み

図40　４個のペットボトルを組み合わせた骨組み

図41　完成作品「昼ねをしているフラミンゴ」

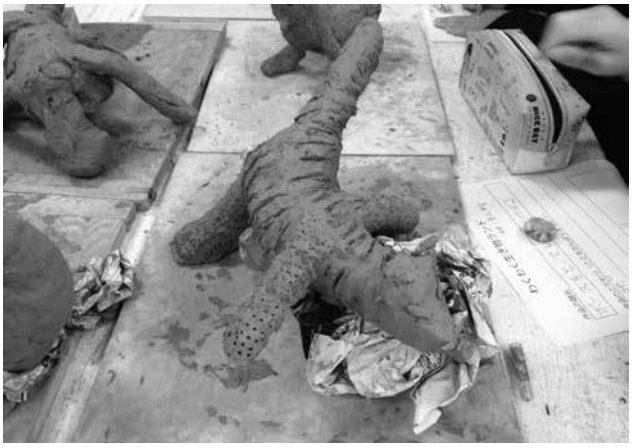

図42　完成作品「ポーズをとっているきつね」

図43　完成作品「魚をねらっているくま」

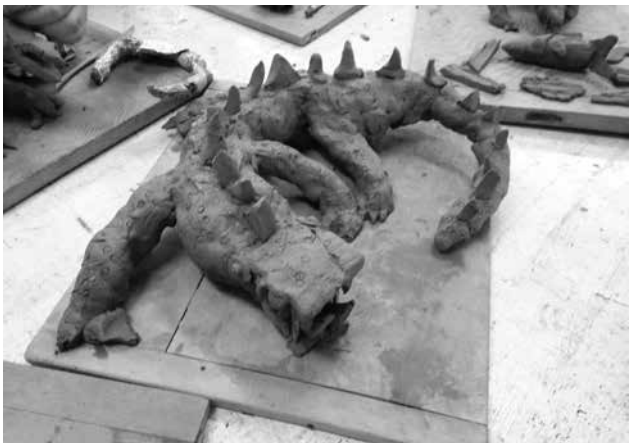

図44　完成作品「食事中のマレーセンザンコウ」

図45　“どべ”を使って接着する様子

本活動の良かった点と課題点は前述の通りであるが、全体的に分析すると骨組みにペットボトルを使用するのは少々無理があるのではないかと感じた。高学年になると結果は変わってくるかもしれないが、粘土（彫塑粘土）のくっつきの悪さを解消するため、麻ひもを巻き付けてグルーガンで接着などして、粘土の引っかかりを作らないことには同様のことになるであろう。今回のペットボトルが、ある程度の作品の大きさに導けたことや動物の動きや特徴につなげられ

たことは利点である。しかしながら、一部の子供においてはこの問題が表現の向上を妨げてしまい、“深い学び”にはつながらなかったと言える。

Ⅳ．結論

この度の実践研究を通して、“主体的・対話的で深い学び”を実現する授業づくりの一端を考察することができた。“主体的な学び”“対話的な学び”“深い学び”が達成できるよう設定した要点や工夫は、複合的に関連して、いずれも必要不可欠かつ重視すべきものであることが明らかになった。また３つの学びの姿は一体的に高められることで、将来的に様々な課題解決を可能とする「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性」の習得に結びつくことを改めて理解できた。

以上を踏まえたうえ、結論としては図画工作科の“主体的・対話的で深い学び”には様々なレベルがあるということを実感した。表現の“造形遊び”“絵や立体、工作に表す”の中から、どの学年でどのような活動を実施し、どこまで学ばせるかを定めることが肝要になってくるであろう。つまり、今後は学年毎に表現領域の到達目標をより明確化することで、各題材における学習のめあてと授業づくりの在り方を見い出しやすくなると考える。そして、このことが“深い学び”の実現と継続を可能とし、子供たちの力強い成長を後押ししていけるのではないか。

謝辞

本研究にあたり、ご協力していただいた鹿児島大学教育学部代用附属田上小学校の校長先生をはじめ、授業担当の指導者に心より感謝申し上げます。

参考・引用文献

１）監修者　花篤實・辻田嘉邦・宮坂元裕・藤江充：ずがこうさく 1･2上下、3･4上下、日本文教出版株式会社、2014
２）中原靖友・豊岡大画：図画工作科におけるアクティブ・ラーニングの視点、群馬大学教育実践研究別刷 第34号、2017
３）波多野達二・芦田風馬：図画工作科における創造的な技能を伸ばす粘土遊びの開発と実践、佛教大学教育学部学会紀要 第16号、2017
４）宮脇理監修：小学校図画工作科指導の研究、建泉社、2000

（平成29年12月15日　受理）